

奈良教育大学

令和4年度 陸前高田市文化遺産調査報告書



令和5年3月

令和4年度 近畿ESDコンソーシアム

## はじめに

奈良教育大学 学長 宮下 俊也

奈良教育大学の学生及び教員による「陸前高田市文化遺産調査」が、コロナ禍を経て3年ぶりに再開できたことは誠に嬉しいことです。今回で10回目となりますが、この間、そして今回も、陸前高田市教育委員会はじめ本調査活動にご尽力、ご指導いただいたすべての皆様に、まずもって厚く御礼申し上げます。

この調査は、陸前高田市の一市民から文化庁に寄せられた、東日本大震災による被災を免れた陸前高田市の文化遺産に対する調査依頼がきっかけとなり、本学の山岸公基教授を中心に仏像調査をさせていただいたことから始まっています。

「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」という陸前高田市立仮設博物館の玄関に掲げられているスローガンは、本学が力を入れている伝統文化・文化遺産教育、持続可能な開発のための教育（ESD）を学ぶ学生にとって、現地に赴き、その意味を深く考え理解しなければならないものです。本年度の調査団は、「文化遺産班」と「ESD防災班」に分かれ、それぞれの活動と共通の活動によって充実した3泊4日を終えることができました。この報告書にはその結果が記されています。

私から参加した6名の学生に願うことは次の2点です。第1は、大震災により陸前高田市をはじめとする各地で多くの方々が犠牲になられたことを決して忘れることなく、皆さんが自ら考える多様な方法で、これからも復興のために力を尽くし続けてほしいこと。第2は、この経験をもとに「命を守ること」「地域を愛し守ること」を、皆さんが今後活躍する地で次世代に引き継いでいく努力をしていただきたいこと。これらは、今回の活動のために場を提供してくださったり、ご講話やご指導をいただいたりした方々への感謝であるとともに、ユネスコスクールであり、国立大学であり、教育大学である奈良教育大学で学んだ学生として、社会に対して果たす使命であると考えます。

さて、私自身、まだこの調査団に加わったことがなく、陸前高田市に伺ったこともありません。それなのに、このようなことを書いている自分が大変恥かしくも思えます。この活動が陸前高田市の支援や発展のため、そして全国や世界の防災、減災に資するものとして今後も続き、私も来年は是非参加させていただくことを希望します。

最後になりますが、あらためて、普門寺御住職熊谷光洋師、陸前高田市教育長山田市雄様、陸前高田市立博物館長松坂泰盛様、はじめ、すべての関係各機関、関係の皆様にご感謝申し上げます。



令和5年3月

# 目次

はじめに

令和4年度 陸前高田市文化遺産調査概要報告

陸前高田市文化遺産調査団に参加して 井阪愛子

令和4年度陸前高田市文化遺産調査に参加して 笠置千尋

陸前高田市文化遺産調査に参加して 辰上亜弥子

防災・減災教育と復興 川田大登

陸前高田市文化遺産調査に参加して 広野祥子

陸前高田市文化遺産調査団に参加して 木幡美幸

ESD 子ども用教材

陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (10)

中学2年総合的な学習の時間 単元構想案 木幡美幸

第2学年 国語科学習指導案 川田大登

「総合的な学習の時間」単元構想案 井阪愛子

岩手県陸前高田市普門寺仏像調査報告書

# 令和4年度 陸前高田市文化遺産調査概要報告

ESD・SDGs センター 大西 浩明

## 1. 目的

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約1割にあたる人命が失われたほか、市の重要施設が被災し、多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、2012年度より8回にわたって本調査団を派遣してきた。この間、文化財調査やそれをもとにした教材作成を進めるとともに、被災地の復興状況を視察し、被災された方からの聞き取りやボランティア活動などを通して、ESDの理念に基づいた防災教育に資する教材作成を行うなど、大きな成果を得てきた。しかし、2020年度より2年間はコロナ禍によって中止を余儀なくされた。本年度は、これまでの成果をさらに深めるため、本調査団を組織し実施する。

2. 実施日 令和4年9月7日（水）～ 10日（土）

3. 参加者 学部生 : 広野祥子、川田大登、木幡美幸

大学院生 : 笠置千尋、辰上亜弥子

教職大学院生 : 井阪愛子

大学教員 : 山岸公基、加藤久雄、大西浩明

4. 宿泊地 民宿吉田（陸前高田市米崎町松峰 110-5）

## 5. 日程・活動

	文化遺産班	ESD 防災班
7 日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多賀城跡、多賀城碑見学</li> <li>・多賀城廃寺跡見学</li> <li>・普門寺打合せ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東日本大震災津波伝承館見学 【陸前高田市気仙町土手影 180】</li> <li>・一本松、気仙中学校跡等周辺の震災遺構見学</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・陸前高田市教育委員会表敬訪問 【陸前高田市高田町字下和野 100】</li> </ul>	
8 日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普門寺調査 【陸前高田市米崎町地竹沢 181】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市立博物館副主幹 佐藤由也氏より講話 (前市民協働部長) 「陸前高田市の復興状況と地域コミュニティづくりについて」 @陸前高田市立博物館 【陸前高田市高田町字並杉 300 番地 1】</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・市立図書館長 菅野義則氏より講話 (元小学校長) 「防災教育と復興教育について」 @陸前高田市立図書館 【陸前高田市高田町字馬場前 89-1】</li> </ul>

	文化遺産班	ESD 防災班
9日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普門寺調査 【陸前高田市米崎町地竹沢 181】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 仮設博物館の見学・講話 「被災資料の復元状況などについて」 市立博物館長 松坂泰盛氏 @陸前高田市仮設博物館 【陸前高田市矢作町二田野】</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東日本大震災津波伝承館見学 その他、周辺の震災遺構見学</li> <li>・ 常膳寺見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旧吉田家住宅主屋復旧状況見学 【陸前高田市気仙町】 教育委員会副主幹 佐々木敦美氏 文化財係学芸員 曳地隆元氏</li> <li>・ 市内震災遺構（津波石碑）見学等</li> </ul>
10日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 藤里毘沙門堂見学 【奥州市江刺区藤里字智福 39】</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 豊田館跡想定地見学 【奥州市江刺岩谷堂下苗代字餅田】</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター見学 【平泉町平泉字伽羅楽 108-1】</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中尊寺見学 【平泉町平泉衣関 202】</li> <li>・ 毛越寺見学【平泉町平泉字大沢 58】</li> </ul>	

◎ESD 防災班の今回の調査目的

ESD 防災班の学生（川田、木幡）はいずれも中学校教員を目指しており、教職大学院生（井阪）は現職の中学校教員であることから、現在の中学校における防災・減災教育のあり方を批判的に見つけ、真に自分ごととなり得る防災・減災教育はどうあるべきか、どのような資質・能力を生徒の身につけておかなければならないのかを、震災時または震災後の被災地の取組に学び、奈良の地から提案しようとするものである。

・ 東日本大震災津波伝承館（いわて TSUNAMI メモリアル）の見学から

当施設は、「歴史をひもとく」「事実を知る」「教訓を学ぶ」「復興を共に進める」という4つのゾーンからなっており、被災した実際の物、被災現場をとらえた写真、被災者の声などを展示しているだけでなく、津波のときの人々の行動をひもとくことで命を守るための教訓を共有しようとしている。特に、



人々がそのときどのように考え、どんな行動をとったのかというところに全員が大きな興味をもった。

「3mなら大丈夫」、「3階に上がれば大丈夫」といった、それまでの自分の経験から「正常化のバイアス」が働いたであろう人々の言葉が数多くあり、そうならないためにはどのような教育内容が必要なのかを考えさせられる展示が多くあった。

当時、人々はどう思ったのか？

・津波伝承館周辺の震災遺構の見学



道の駅 タピック45



気仙中学校跡



ユースホステルと  
奇跡の一本松

いずれも津波の威力のすさまじさを感じざるを得ない。特に、津波の高さには圧倒される。「道の駅タピック45」の最上部、気仙中学校の屋上部分まで津波が来たということ、実際に目の当たりにして、そのすごさに改めて恐怖を感じてしまう。

この周辺を歩くと、新たに高さ 12.5mの防潮堤が完成し、気仙川にも大きな水門が完成していた。かさ上げも終わり、町は復興しつつある段階だが、いかにハード面は整備されても、大切なのは人々がそのときにどのように行動するのかというところの一点である。その意味からも、今回の ESD 防災班が取り組もうとしている「自分ごとになる防災・減災教育」というテーマは、どこの地域においても大切な視点であり、汎用性のあるものである。

・講話「陸前高田市の復興状況と地域コミュニティづくりについて」から

前市民協働部長でもある佐藤由也氏より、陸前高田市における震災による被害状況や、その後の復興の経過等についてお話をいただいた。震災の検証作業で得られた反省と教訓として、次の6点を挙げておられた。

- 1) 避難が何より重要
- 2) 避難所に逃げたら終わりではない
- 3) 公的な役割を持つ者の安全の確保
- 4) 災害に強い安全なまちづくり
- 5) 社会的弱者も安全に生活できる社会の実現
- 6) 防災の心得

この中で、6) 防災の心得として、

ア 災害への備え

- ・自然災害を完全に防ぐことは不可能
- ・災害に備えることで被害を軽減することは可能

イ 防災教育の充実

- ・津波の恐ろしさや避難文化の伝承



佐藤由也氏の講話

#### ・住宅再建に伴う自主防災組織の再編・強化

とお話しされていたが、「避難文化の伝承」ということについては、津波だけでなくどこの地域においても地震や水害、土砂災害などの危険性はある、歴史をひもとくと何かしらの伝承が残っていたりするものであり、示唆に富む内容であった。

また、講話後、11月に開館予定の市立博物館の展示について説明を聞いた。展示の一つに、「津波を伝える」コーナーがあり、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波のそれぞれの教訓からこの地の人々が津波に対してどのような認識を持っていたのかがよく理解できた。しかし、それでも今回の津波で大きな被害を出してしまったという事実から、いかに避難文化の継承が大切か、実践的かつ継続的な防災教育が必要かを感じた。

#### ・講話「防災教育と復興教育について」から



菅野義則氏の講話

高田小学校長でもあった市立図書館長の菅野義則氏より、津波襲来時の学校の様子や震災後の学校の様子などについてお話をいただいた。震災当時、教育委員会に籍を置かれていて、地震があったときに市役所から外に出て、学校の様子を見るため下に降りて行ったところ津波が来ていることに気づき、慌てて引き返したというお話をされた。「人間というのは、分かっているにもかかわらず正しい行動がとれない」と、自責の念とともに話された言葉が印象的であった。また、その後の避難の状況について市内の3校を例にお話いただいた。

さらに、陸前高田市における防災教育について、市教育委員会が作成した「明日のために」と題した防災副読本をもとに説明していただいた。また、復興教育としての取組の中で、子どもの心のケアについてのお話があった。要サポートの児童生徒の割合が、沿岸部の児童生徒の方が内陸部の児童生徒より多いのは、震災における影響がまだまだ尾を引いていることがうかがわれる。

#### ・陸前高田市教育委員会表敬訪問



市議会開会中にも関わらず、山田市雄教育長から調査団への激励の言葉をいただくとともに、教育長自ら9階展望ルームからの市内の説明をしていただいた。

・陸前高田市立仮設博物館の見学から

被災したのは人や建物だけではなく、文化財も同じである。震災時、市立博物館などに展示・収納されていたもののうち、約46万点の被災資料の安定化処理が、旧生出小学校に設置された仮設博物館で行われている。救出された資料は、いずれも陸前高田市の自然・歴史・文化を伝える貴重な資料ばかりで、玄関に掲げられている「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」というスローガンそのまま、職員の方々の懸命な作業によって一つ一つの資料を甦らせようとされていた。



玄関にかかっているスローガン



修復作業の様子の見学

博物館長の松坂泰盛氏より作業の概略を説明していただいた後、実際の作業現場を見学させていただいた。例えば、古文書ならばいったん紐解いて一枚一枚の汚れをとり、油脂とり、漂白、洗浄、乾燥を何度も重ねて元の状態に戻すという大変な作業である。

処理の終わったものから新博物館への運び出しも始まっていたが、相当な数なのですべては移転されないようである。全体の70%あまりの修復が終わったが、残っているものは大きいものや修復作業の難しいものばかりだそうで、これからまだ何年もかかるだろうということであった。

・旧吉田家住宅主屋復旧状況見学から

吉田家住宅は、江戸時代に仙台藩領気仙郡（現在の陸前高田市、住田町、大船渡市、釜石市唐丹）の24箇村を治めていた大肝入吉田家の住宅である。後に「大庄屋」と呼ばれ、主屋は東側の表門側に座敷3室を設け、北側には広い土間部の御臺所があり、それらの間を広い居間部でつないだ大規模な茅葺の建物であった。津波によって全壊し、座敷廻りは屋敷の西側に約100メートル、茅葺屋根は諏訪神社を回った旧気仙小学校側に約300メートル流出した。土蔵や味噌蔵などは屋敷の西側に流出し、流された跡地には近在の建物の部材が散在していた。



主屋復旧状況について説明を聞く

復旧にあたっては主屋を復旧することを第一とし、回収された残存部材をできる限り活用する方針で、その数は全体の6割程度の1000本を超えている。しかし、実際に使おうと思えば、使用箇所の特典、洗浄、補強なども必要であり、何よりもどのように組み合わせるのか、そのためにどう加工すればよいかという、建築当初との技術の壁もある。見学させていただいたときは、ちょうど屋根の茅葺き作業をされていたが、多くの茅を調達するだけでも大変なようで、作業自体も地道に進めていかなければならない時間のかかる作業である。





復旧作業中の主屋での説明

午前中に見学した仮設博物館にある、「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」というスローガンを思い出した。地域に残ってきた大切な文化財を「災害ごとき」で失うことは、大きな「心の損失」である。作業にあたっておられる職人さんや作業員の方々の必死な姿に頭の下がる思いであった。

・津波石碑の見学から



津波記念碑  
 明治廿九年六月十五日  
 日午後八時襲来  
 死亡者全村五五二名  
 流失戸数同一五七戸

一、大地震の後には  
 津波が来るよ  
 一、地震があつたら  
 高所へ集まれ  
 一、津波と聞いたら

昭和八年三月三日午  
 前三時襲来  
 死亡者全村四五名  
 流失戸数同一二五戸  
 石巻市石井敬三郎刻

一、惣捨て逃げろ  
 一、低いところに住  
 家を建てるな

低いところに住家を建てるな

それ津浪  
 機敏に高所へ

## 陸前高田市文化遺産調査団に参加して

教職大学院 M2 井阪 愛子

### 1. はじめに

毎年のように台風や大雨、地震などの震災関連のニュースが流れているが、目の前にいる中学生達は、災害をどこか「他人事」のように捉えているように感じる。「南海トラフ地震があったとしても、奈良はそんなに揺れなしろし津波もこない」というような内容の話をつまに耳にする。だが、そのような考えでよいのだろうか。絶対的な安全などあり得ないし、自分さえよければそれでよいとも思えない。

今回、陸前高田市文化遺産調査団 ESD 防災班の一員として、東日本大震災を体験された方や復興に携わっている方との対話を通して、「真実」を知ること、奈良においてどのように防災教育を行えばよいかを考える機会にしたいと考える。

### 2. 陸前高田市に着いて

初日に車で仙台空港から北上し陸前高田市に入ったのだが、陸前高田市は私のイメージする海沿いの町ではなかった。私が一時期住んでいた淡路島は、海沿いに行くと瀬戸内海の広がりを見ることができ、波の音が聞こえてきた。しかし、陸前高田の海沿いには、12.5M の防潮堤があり、海を見ることはできずに波の音も聞こえてこなかった。

海沿いには一面に防潮堤が広がり海と陸地を遮っていた。

陸前高田市の防潮堤は東日本大震災以前から存在し、津波の被害があるごとに防潮堤を高くしているそうだ。つまり、防潮堤では津波を止めることはできないということになる。なのになぜ、海と陸地を遮ってまで防潮堤を作るのか不思議に思ったのだが、「東日本大震災津波伝承館」解説員の方は「防潮堤があれば時間稼ぎができ、その間に避難することが出来る。」とおっしゃっておられた。陸前高田の人々が、今もこれからも津波と向き合い「命」を最優先に考えておられる現実を実感した場面であった。



### 3. 聞き取りとフィールドワークより

#### 3.1. 「陸前高田市の復興状況と地域コミュニティづくりについて」

講話より、特に私自身考えたのが「災害マニュアル」（ハザードマップ・防災マニュアルなど）についてである。予想を超える震災は、マニュアルの予想も超えてくることになるためマニュアルをどのようなものとして捉えるのが良いのかと以前から考えていた。実際に震災の際には、マニュアルを越えて機転を利かしての行動も多く見受けられ、多くの「命」が救われたようだ。マニュアルを越えた行動ができる人とは、マニュアルを熟知しているからこそ、超える行動ができるのだと今回の訪問を通して理解した。

マニュアルとは、理論や経験からの知見を一般化したものであり体系的にまとめられているため、学習や

確認のためにとっても有効であると考え。また、個人の判断にゆだねると命の危険が伴うような事柄については、マニュアルで具体的に教示することが望ましいと感じた。(津波到達 10 分前には救助を終え、安全な場所に避難を完了するなど)

### 3.2. 「防災教育と復興教育」

被災地で学校教育が再開することは、地元の希望になるものと思われ、子供たちが学校に行くことで、大人も日常を取り戻していくのだろうと推測する。ただ、子供達も先生も色々な思いや経験があることは間違いなく、データからも、今なお被災地の子供や大人へのケアの必要性があるようである。そのような中での復興教育は、ケアの精神を意識した生徒達のレジリエンス力を高めることに重きが置かれているようであった。その上で、防災教育として「まず非難する」ことを繰り返し徹底して指導されていた。震災時、学校にいた者は「まず避難する」ことが出来たそうだが、地域の方々の中には避難開始が遅かった方もおられたそうで、避難の難しさを考えさせられた。

### 3.3. 仮設博物館の見学・講話、旧吉田家住宅復旧状況見学

「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」の文字が仮設博物館の玄関に掲げられていた。文化財の修復に携わる方々の様子や思いを伺わせていただいたことで、自身の阪神淡路大震災の日を思い出した。家の中は足の踏み場がないほど家財道具が散乱し、高校の卒業証書が水浸しになった。壊れてしまったものは色々あったが、卒業証書がひどい状態になったことがいまだに忘れられない。卒業証書は捨てたつもりでいたが、最近実家の本棚奥にあることを見つけて、親が保管してくれたのだろうとありがたく思った。今までの軌跡がなくなることの虚しさなど、人として大切な営みについて考えさせられた。



## 4. 奈良の地における防災教育について

今回の調査から私が行う防災教育における目標を、「命を守る行動ができる人になる」としたい。陸前高田を訪問し、「命を守る行動」を頭で理解していても「命を守る行動」がとれるとは限らないと感じた。客観主義的に知識を得るだけでは頭で理解することにとどまるため、構成主義的に知識を多くの人と共有し構成していかなければ「命を守る行動」をとることが出来ないと考える。

そこで、学校教育において、生徒同士や地域の人など多様な人々と対話や協働的な取り組みを通して学習を行うことで、「命を守る行動」ができる生徒を育成できると考える。

## 5. 最後に

東日本大震災で起こった「事実」は、データなどから、陸前高田に行かなくとも多くのことを収集することが出来るが、防潮堤の真実や文化財への思いなどの「真実」は、地元を訪れたり、地元の方々の話を伺わないとわからないことであった。

生徒達が、「命を守る行動ができる人になる」ために、今回の調査で分かったことを私個人のものとするだけでなく、奈良県の教育に生かしてけるように努力していきたい。

## 令和4年度 陸前高田市文化遺産調査に参加して

大学院教育学研究科 修士課程

1回生 笠置千尋

### 1. はじめに

令和4年9月7日から10日にかけて陸前高田市文化遺産調査団の一員として、陸前高田市米崎町普門寺の伝聖観音菩薩坐像を中心とした仏像調査、また文化遺産や震災遺構の見学に参加させていただいた。仏像調査では事前に学習していた知見と照らし合わせながら実物の像をよく観察することで、仏像の表現や技法についてより深く理解することができた。また東日本大震災津波伝承館や奇跡の一本松等の遺構を見学し、津波被害と復興、防災教育について新たに知ることができた。

### 2. 仏像調査について

今回の調査のメインである普門寺伝聖観音菩薩坐像は南北朝時代の制作で、室町幕府との繋がりが強かった院派の仏師によって造像されたと考えられている像である。像内脚部には永禄2年(1559年)の再興銘がある。

調査では初めに先生と共に法量測定をさせていただいた。正確な数値を測るためになるべく手ぶれを抑えることや像の中心をとらえることなど、何を意識する必要があるかを実際に作業しながら学ぶことができた。形状ノート作成では像をよく観察し、衣文において院派の特徴が非常によく表現されていることを改めて知ることができた。また髻の構造が他の像ではあまり見られない独特な表現となっていることが分かりとても興味深かった。



伝聖観音像の法量測定の様子



仁王像の内部を観察する様子

ファイバースコープを用いた像内の調査では、先行研究で明らかにされていた再興銘の他に銘記がないかを調べた。首柄に通して頭部や面部の観察を行ったが、残念ながら銘記を見つけることはできなかった。しかし面部を内部から見ることによって玉眼の構造について実物を見てより詳しく知ることができた。また再興銘についても、先行研究における解釈や不明とされていた字についての再検討を行い、不明の字の一部は読むことができ、新たな解釈を得ることができた。

翌日に行った代門仁王像の調査では損傷が激しい像を扱ったため緊張感をもって移動や観察をした。阿形像の像内には蜂の巣の痕跡があり、それを除去する作業も行ったことで、門など風雨にさらされ虫害の危険性も高い環境における文化財の保存の難しさについて考えるきっかけとなった。

### 3. 震災と普門寺

普門寺には今回調査した仏像の他にも、震災後に犠牲者の鎮魂のために制作された親子地蔵が安置されていた。この像は長野県の善光寺が津波の被害を受けた高田松原の倒木を使って制作した4体の地蔵のうち3体を安置したものだった。また本堂内にも犠牲者の供養のために、死者・行方不明者と同じ数の「ねがい桜」が奉納されていた。これらは調査した仏像のように長い歴史のなかで残ったものではないが、震災という大きな出来事とその中での人々の祈りや信仰が形になったものとしてまさにこれからの未来に向けて守っていくべき文化財であると感じた。

### 4. 震災遺構見学、防災について

陸前高田市に到着した一日目には東日本大震災津波伝承館を見学した。展示では地震と津波のメカニズムや日本における津波被害の歴史を学べるとともに、東日本大震災で被災した実物の展示や映像によって現場では何が起こっていたのか、どのような被害があったのか、被災した人々はどのようにして過ごしていたのかなどを伝えるものとなっていた。

街並みについても、土地のかさ上げのため街全体が震災前より10 m高い位置に作られており、海岸には全長約2 kmに及ぶ防波堤が建造された。震災による被害とそこから得た教訓を踏まえて、今後の災害に備えるため、人や街を守るための復興がどのような形で行われて来たのかを目の当たりにし、自然に対しての人間の持続可能性について考えるきっかけとなった。



宿泊した民宿から見た防波堤

### 5. おわりに

今回の調査団に参加したことで仏像調査という貴重な経験をすることができ、さらにはその調査を通してその地域の歴史や所蔵する寺院の沿革等について知ることができた。また震災遺構や伝承館の見学と合わせて陸前高田市というフィールドにおける歴史と文化財、そして震災を経たうえでの復興や生活に触れることができ、地域の人々の生活を自然災害から守っていき持続可能なものとすることの重要性を考えることができた。

## 陸前高田市文化遺産調査に参加して

修士課程伝統文化・国際理解教育専攻

1 回生 辰上亜弥子

### 1. はじめに

2022年9月7日から10日にかけて陸前高田市文化遺産調査に参加させていただいた。今年度の調査団は新型コロナウイルス禍を経た3年ぶりの派遣であり、難しい局面も多かったと推察される中実現させていただいた陸前高田市教育委員会の皆様と大学教職員の皆様に心より感謝を申し上げたい。私は今回が2度目の参加だったため、文化遺産調査の感想と、初参加の2018年度と比較して感じた変化について述べたい。

### 2. 文化遺産調査について

今回は陸前高田市にある海岸山普門寺の仏像調査を二日間行わせていただいた。一日目は南北朝時代と推定される伝聖観音菩薩坐像(県指定文化財)を調査し、二日目は堂宇からやや下った代門の仁王像を調査した。このような調査の場には何度か参加させていただいているが、新型コロナウイルス流行が原因でここ数年機会が無くなっていた。普門寺様と再び文化財を直接調査できる機会を得られたことに深く感謝したい。今回はファイバースコープで像内を観察するという初めての体験をし、普段なかなか目にすることのない内削りの質感や寄木造の構造などを学ぶことができた。前回参加した時の自分は学び始めて日の浅い学部1年生で知識もあまりなかったのだが、綿密な事前学習もあり像を観察して形状を記録し寸法を測るという調査の流れにも主体的に参加できたのが良かったと思う。



筆で仏像に付着した埃を除去する

初参加の際にも報告書に書いた通り、文化財を通してそれを守り伝えてきた人々の想いに触れられるというのは格別な体験であり、私の精神を引き締めてくれる。今回も様々なところから長きにわたる人々と土地、文化財を繋ぐ想いに触れることができたのでその体験をいくつか述べていきたい。

普門寺伝聖観音菩薩坐像の像底には永禄二年(1559年)の再興銘があることが知られている。永禄二年は桶狭間の戦いの一年前で、歴史上では安土桃山時代に分類されるため、本像の制作年代と推定される南北朝時代からはかなり下ることがわかるだろう。ここから、昔作られた像を後世に生きた人々が様々な願いを込めて修理するなどしたということがわかる。今回の調査で実際にその銘文を目にし、人々の想いを受け継いで文化財と向き合う気持ちを新たにすることができた。

代門の仁王像は野外に近い環境下に安置されているため損傷が激しく、表面の色の剥落も著しかった。しかし、筆を使って注意深く埃を落とすことで本来の猛々しい姿が鮮明に表れたのは良い思い出である。阿形吽形の背後の壁にそれぞれ銘札があり、吽形側に天明三年の再興と記されていた。普門寺が江戸時代にも人々の心の拠り所にされていたということを目の当たりにした。

人々の文化財やお寺に対する気持ち、そしてお寺を通して命を供養したいという願いは震災から11年経った現在、更に様々な形をもってあらわれていた。普門寺本堂には全国から寄進された仏像などが並んでおり、東日本大震災の犠牲者を供養する「ねがい桜」も大変印象的だった。他にも新造の地藏堂や代門から本堂へ向かう道に置かれた五百羅漢象などからも、人々の普門寺と陸前高田への愛、犠牲となった方々への鎮魂の想いを感じることができた。

美術史を学ぶ身として多くの収穫を得られた今回の調査だったが、加えて人々と土地、文化財を繋ぐ想いが非常に強く感じられ私の中で最も心に残る経験の一つとなった。

### 3. 被災地の復興を目にして

陸前高田市役所庁舎と東日本大震災津波伝承館は前回調査に参加した後に完成した建物だ。陸前高田市役所は2018年に訪れた際はプレハブの仮庁舎だったが、土地のかさ上げ工事が完了し整備された区画に立派な庁舎が完成していた。津波伝承館は令和元年に開館した施設で、東日本大震災発生時の様々な人々の生の体験を目にすることができた。今まで何度もテレビで見たり話を聞いてきた様子を、写真なども併せ改めて克明に追体験することができた。海岸側に進むと津波で流されてしまった松原の再生を目指して植えられた苗木の向こうに海が見える。3年ぶりに訪れた陸前高田は静かな海と広い平野を見せてくれたが、これは今までの調査参加者が見た景色とも違うのだろう。これからも続くであろう復興の一刻を見ることができた。



再生の始まった松原

### 4. おわりに

今年度調査させていただいた普門寺は優れた仏像を長年守られているのと同時に、震災当時から様々な人々の心の拠り所となり、陸前高田の復興を支えられてきたのだと感じた。今後の教材開発では昔の人々から継承されてきた様々な想いや愛着と共に仏像を紹介することにより、次の社会を作っていく世代に陸前高田という地域を文化遺産という面からも誇りに感じてもらえるような内容にしたいと強く思った。

# 防災・減災教育と復興

## —陸前高田で見聞きしたことを通して—

国語教育専修3回生 川田 大登

### 1. はじめに

2022年9月7日から10日までの4日間、陸前高田市文化遺産調査団のESD防災班として、陸前高田市を訪れた。私にとっては初めて東日本大震災の被災地に行く機会であった。高速道路のインターチェンジをおりて、ナビでは海の近くを走っていることが示されているが、海は見えず、堤防の先にある遠い空しか見えないという異常さは、このまちで尋常ではないことが起こったことを物語っているように私には感じられた。

調査においては、東日本大震災津波伝承館や津波の伝承碑等の見学を行ったのに加えて、多くの方々のご尽力により、まちづくりや学校教育に携わる方々にお話をきいたり、博物館や図書館、復旧中の文化財等をみせていただいたりして、かけがえのない経験をすることができた。

ここでは、そのような充実した4日間の中で、学んだことやそれをもとに考えたことを大きく二つの観点で述べる。

### 2. 防災・減災教育

一つ目に防災・減災教育について述べる。

陸前高田市は地震に伴う津波で市街地が壊滅状態となった。陸前高田市東日本大震災検証報告書によると、陸前高田市における東日本大震災での犠牲者数は15,757人で、岩手県内最大であった。また、津波浸水域内に住んでいた人口に対する犠牲者数は10.04%である。高田松原地区震災復興記念公園に残るいくつかの震災遺構からは、その津波の威力を肌で感じる事ができた。さらに、お話を伺った方の一人が「うちは家が海に近いことから事前に避難場所と集合場所を決めていたこともあって家族全員助かったのですが、周りの人にはよう言いません。」とおっしゃっていて、どれだけ多くの方が亡くなったのかを実感した。

このような凄惨な被害があった中で、命を守れるかどうかのポイントはいかに避難するかということであることが、資料を読んだり、お話をきいたりする中で分かった。前出の報告書によると、津波で亡くなった、もしくは行方不明になった人のうち、津波到達前までに避難した人は5割だったのに対し、被害が無かった人のうち、津波到達前までに避難した人は8割であった。加えて、指定の避難所を津波が襲ったことが少なくなかったこともあり、「さらに高いところに」という意識で逃げる事が命を守るために重要であった。

マニュアルや前例にとらわれず、「さらに高いところに」という意識で逃げる事が大切であることは、当時の小中学校における避難を伺う中で切実に感じた。陸前高田市では、学校の指示で避難して亡くなった児童生徒はいなかったそうだ。その理由としては、主に校長先生の指示で、学校の裏山やさらに高い避難場所に逃げたことが挙げられる。避難場所として指定されていた学校でも津波にのまれた例があるが、「さらに高いところに」という意識によって命を守ることができたのだろう。

一方で、「大きい地震があれば津波が来る」ということは小さいころから教えられてきた上、小さいながらも何度か津波を経験してきたため、「津波が来たら高いところに逃げなければならない」という



震災遺構タビック45にて



ことが分かっているにもかかわらず、実際の行動に移すことに困難さがある場合があることもわかった。それはお話を伺った方の一人が語られたエピソードでわかったことである。その方は、当時、市役所を拠点に仕事をされていた。地震の日、出張で内陸の方に行っておられたが、大きな揺れを感じ、「災害対応のため戻らなければならない」と思い立ち、市役所に戻ろうとされたそうだ。市役所は沿岸部にあり、津波が最上階まで到達するほどの低い場所にあった。しかし、津波が来るからその場にいようとは、そのときは考えられなかったそうだ。その方が市役所に向かっていったとき、下から走って上がってくる小学生たちとすれ違ったが、さらに下に行った。そうすると、目前に津波が来ていることがわかった。その瞬間、慌てて引き返すことにし、ようやく高いところに向かって逃げるといった行動になったそうである。このように、わかっているにもかかわらず行動に移すことができないという難しさを感じた。

このことは、防災・減災教育を、単なる知識伝達にとどまらず、その知識が「生きて働き」、行動につながるものにしなければならないことを示唆していると私は考える。今回の調査では、『陸前高田市防災教育副読本 明日のために』や『防災学習ノート まもるくんノート』という、実際に陸前高田市の小中学校において、防災・減災教育、復興教育で使われている教材を頂くことができた。様々なお話やこれらの教材という貴重な資料を十分に検討し、参考にして、中学校における防災教育の提案をしたい。

### 3. 陸前高田の復興とまちづくり

2では、防災・減災教育を中心に学校教育について述べてきたが、今回の調査では、まちづくりや博物館、再建中の文化財についても見せていただいたり、紹介していただいたりした。二つ目に、これらの中から特に博物館と文化財の復元・保存について述べる。

今回、11月に開館する新博物館と、未だに多くの展示品の復元作業が続いている仮設博物館の両方を見せていただいた。前者では、新しい博物館ができていく過程をみせていただくとともに、未だ多くに人の目に触れていない展示から学ぶことができた。後者では、復元作業の現場を見学し、説明していただくとともに、大きな収蔵庫もみせていただいた。

そのような見学を通して、最も印象に残ったのは、仮設博物館にあった、「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」というフレーズである。陸前高田市では、市立博物館が津波に流され、多くの文化財が被害を受けた。どの文化財も受けた塩害は特に深刻であるらしく、世界最先端の技術で塩を抜き、様々な方法で復元が行われているらしい。地震から11年が経った今でも、まだまだ復元しなければならないものが残っているという。



陸前高田市立仮設博物館にて

津波や災害ときくと、まちの復興やそこに住む人々のケアが思い浮かびがちであるが、その町の歴史を語る文化財を復元し、守っていこうとする営みがあることを今回の調査で知ることができた。

### 4. おわりに

今回の調査では、多くの方のご協力により、ここに書き尽くすことができないほどの多くの貴重な経験をさせていただいた。改めて感謝を申し上げたい。

学んだことを生かして、防災・減災教育についての提案を行い、それによってこの調査にご協力いただいた多くの方々への恩返しとしたいと思う。

## 陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化遺産教育専修 二回生 広野祥子

### 1. はじめに

2022年9月7日から10日にかけて陸前高田市文化遺産調査に参加した。東日本大震災で被災した陸前高田市という場所で、防災教育や文化遺産について考える機会を得られたこの調査に参加できたことは私にとって、とても貴重な経験となった。私は今回文化遺産班のひとりとして参加し、初めての文化遺産調査を縁ある東北という地域で行えたことが何よりも印象的なものであった。

### 2. 被災地を訪れて

震災から11年経った今、かつて被災地であった陸前高田市は高い堤防と新たな建物がそびえ、再び植林された松が浜辺に広がる新しい姿に生まれ変わっていた。震災から学んだ防災を活用し、復興を遂げた陸前高田市の風景は圧巻だった。その風景には、震災を忘れないように、そして二度と繰り返さないように「津波伝承館」や「震災遺構」といったものが陸前高田市復興の風景の中に含まれていることも忘れてはいけない。後世に震災当時何が起こり、そこからどう再び立ち上がったのかを知ることができる光景として、陸前高田市という場所を訪れる意味の重要性を今回の訪問で実感した。

しかし、私が最も印象的だったことは、陸前高田市に住む方々が震災を乗り越えて生きているということである。私は震災から三年経った頃に、一度だけ仙台でチャリティーコンサートに参加した経験がある。その時には、復興応援のために作られた『花は咲く』という曲を聞いて涙する女性がいたのを覚えている。そして今回の陸前高田市訪問で出会った方々は、今でも鮮明に「悲しい記憶」として震災の記憶を心に残し新しい一歩を踏みしめていた。だからこそ、この陸前高田市の調査によって陸前高田市の歴史ひいては東北地域に住んでいた人々の信仰・暮らしに少しでもふれることができることの意味を改めて考えながら調査に臨むことができた。

### 3. 文化遺産調査に参加して

今回の文化遺産調査では、「曹洞宗海岸山普門寺」の「伝聖観音菩薩坐像」と「仁王像」が調査対象となった。私自身、初めての仏像調査の現場であり、調査のやり方や調べる事柄、調査の視点といったものを、調査を通じて学んだ。私自身は未熟な部分はいくつもあったが、先生・先輩方の仏像に対する敬意の表し方や現地の方々の伝聞と調査結果の差異のとらえ方、仏像の経年劣化の特徴といったものを目の当たりにすることができ、今後、文化遺産調査に携わる際の参考になることが多々あった。今回の調査では、ファイバースコープを用いた調査が中心で、像内の大きさなどの構造と銘文の有無の確認が主に調査対象となった。さらに、寺の古文書の記載と照らし合わせながら仏像の再興年代などを確認していった。

今回の調査では「伝聖観音菩薩坐像」も「仁王像」のいずれにも、残念ながら像内に銘文は見つからなかった。また、再興に関する文は、「伝聖観音菩薩坐像」は像底に、「仁王像」は札に記載があり、古文書とも照らし合わせつつ解説を進めていた。その調査中、地域住民の発願や観音堂の状態、仁王を入れた入れ物の寄進があり、長い間普門寺が地域の信仰の場であり、大切にされてきたことがうかがえた。普門寺は東日本大震災の際には多くの犠牲者の方のお墓が建てられ、復興のシンボルとして「ねがい桜」というものや震災後に掘られた五百羅漢像が安置されている。地域に大切にされてきた寺に残る仏像の調査に関わることができたことにより、改めて信仰の場という人の拠り所の大切さを感じ、より多くの人が守り、受け継いでいくことが重要であると私は考える。したがって、調査を経て、これからさらに東北並びに日本の歴史にふれながら、さらに地域に大切にされる仏像として認知されるようにするために調査がとても重要であることを私は学んだ。

#### 4. 終わりに

寺にあった古文書には、おそらく「仁王像」が置かれていた門を「代門」と表現された記載を見つけた。しかし、なぜ「代」の文字が使われていたのか、そしてそもそも「仁王像」がいつから安置されていたのかなど、未だ分からないことも多い。「聖観音菩薩坐像」も同様で、誰が作り、本堂に安置された本尊と何となく似ていることなど、これからより詳細な調べが必要になるかもしれない。しかし、今回の調査を通じて、普門寺という寺が長い間陸前高田市という場所で大切にされ、仏像たちは震災などの悲しい経験や復興していく陸前高田市の様子を今も見守っている。そのことを陸前高田市にいる方々にぜひ広く知ってもらい、地域への愛着と重要な文化遺産を見に行く機会をつくってほしいと私は思う。

多くの人に東北特有の文化や歴史を知ってもらうことで、復興はさらに進み、地域振興も可能となる。私自身、新潟出身ということもあり、東北には親近感がある。そのような地域の文化振興につながる調査に関わることができたことを誇りに思い、そして初めての文化財調査が東北で行えたことにどこか運命的なものを感じた。これからも、この調査を忘れることなく、学んだことを私自身も糧にしながら調査や教育などの様々な文化振興につながることをしたいと考えた。



聖観音菩薩坐像調査の様子



仁王像阿形調査の様子

## 1. はじめに

私は2022年9月7日から10日まで陸前高田市文化遺産調査団 ESD 防災班として参加した。陸前高田市の東日本大震災津波伝承館等の施設、震災遺構(図1)、津波の恐ろしさを伝える石碑を訪れたり、防災教育・復興教育、被災資料の復元状況について学んだりした。松坂泰盛氏をはじめとするたくさんの方々・施設等のご協力のおかげで大変価値のある4日間を過ごすことができた。

## 2. 現地での活動を通じて学んだこと

私が現地で学んだことは4つある。

1つ目は、復興はまだ終わっていないということだ。震災から11年半も経っているのだから復興は終わっており、家もたくさん建っていて人もたくさんいるというイメージが漠然とあった。しかし陸前高田市は新しくきれいな建物が並んでいるが、その近くに家は建っておらず、高台の方に家が建っていた。私は、人が喜ぶようなきれいな建物はあるのに肝心の人がいないアンバランスな光景に寂しさを感じた。

復興という言葉調べてみると「精選版 日本語大辞典」には「衰えた物事が再び盛んになること、また、再び盛んにすること。再興。」と書いてあった。この言葉の定義からも陸前高田市はまだ再び盛んになり切れていないと思った。また、復興といっても災害の場合、地域自体に焦点を当てた「町の復興」と地域の人々の心に焦点を当てた「心の復興」があると気がつくことができた。心の復興に気がついたきっかけは小学校1年生で要サポート児童の割合を沿岸部児童と内陸部児童それぞれで出したデータを見せていただいたことだ。震災があった平成23年は沿岸部児童の方が少し内陸部児童と比べて、要サポート児の割合が高かった。しかし、令和2年は両者とも要サポート児童の割合は低くなっているが、沿岸部児童の方が内陸部児童より要サポート児の割合の差は平成23年より大きくなった。私は震災を経験していない世代なのに震災を経験した世代の時よりも割合の差が大きくとっても驚いた。このことから、もしかすると親の心の復興がまだ終わっていないから震災を経験していない子ども世代にその影響が出て、このような結果になったのではないかと思った。

そこで心の復興はいつ終わるのかと考えてみた。心の復興は震災を経験したことを完全に忘れることではなく震災を経験した事実を受け入れ消化し、自分を構成する一部として震災を経験したことを捉えられるようになったら終わるのではないかという考えに辿り着いた。陸前高田市が震災前より活気のある市になること、人々の心の傷が癒えることを祈るばかりである。

2つ目は、防災意識よりも町が、人が暮らす上で以前より安全であることが大切だということだ。私は事前学習の一環として、陸前高田市の復興についてインターネットで調べた。信頼できると判断した復興についての記事を多く読んだが、どの記事も陸前高田市のかさ上げや防潮堤(図2)についてお金をかけたのに人は戻ってこず失敗だと取り上げていた。そのため私も陸前高田市の復興は失敗しているかもしれないと思った。現地を訪れてみると、私にとって記事で特に批判されていたかさ上げより、防潮堤によって海が近くにあるのに海を感じられないことは不思議で気になった。人間生活と自然は切っても切り離せず、時々自然は人間生活に猛威を振るう。それに対して人間は無力である。そこで私は防災意識をもって自然と共生する「自然と共に生きている」という意識を日頃から持つことが必要だと考

えていた。そのため防潮堤があると安全だが、特に震災を知らない世代は海と共に生きているという意識を人々が持ちにくく防災に対する意識も低くなってしまっているのではないかと思った。

以上の2点から私はかさ上げではなく防潮堤についてどのように考えているか3人の方(①震災前から陸前高田市に住んでいる方、②震災後から陸前高田市に住んでいる方、③陸前高田市の隣の大船渡市に住んでいて、陸前高田市の東日本大震災津波伝承館で働いている方)からお話を伺うことができた。②の方が「娯楽として海水浴に陸前高田に来て海が見えないのは良くないかもしれないが、このような娯楽と生活は異なる。安全を確保して自然と生きることが大切なのではないか。自分は防潮堤があることに不自然さを感じたことはない。」というようなことをおっしゃった。この方のお話から、自然に対する意識の持ち方云々より震災を乗り越えようとしている地域でそこが人々にとって以前より比較的安全に暮らせる環境になることが大切だと気づかせていただいた。震災を知らない世代がその意識が持てるように、家庭・学校・地域で取り組んでいけばいいと考えた。

3つ目は復興が失敗したかどうかは被災地に住んでいる個人個人が判断するものだという事だ。私は自身の事前学習から、現地の方も否定的に捉えている人が多いのではないかと考えていた。しかし3人の方には防潮堤を肯定的に捉えているという共通点があった。このことから、復興の成功の有無はあくまで現地の人一人一人が判断するもので、外部の人間が判断するものではないと気がついた。また、まさに「百聞は一見に如かず」だと思った。外部の人間がすべきことは復興が成功か失敗かの判断を下すことではなく、被災地が再び盛り上がるように協力することだと思う。

4つ目は被災した資料を復元することも地域の歴史を繋いでいくために大切だということだ。被災した資料を復元する施設で「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」紙が貼ってあり、復元に関わる人々の熱い想いを感じた。これまで被災した資料についてあまり知らなかったので考えたこともなかったが、資料が復元されることで歴史が引き継がれ、地域が持続可能になると考えた。また、歴史を引き継いでいくためにはその資料の価値を次世代に伝えることが必要だと考えた。

### 3. 終わりに

先ほど学んだことで復興について述べた。これは生まれてから大きな災害を直接経験したことのない私が辿り着いた考えであるため、もしかすると被災したことのある人から見ると見当違いな考えであるかもしれない。しかし、調査団に参加したことで初めて復興についてじっくり考え自分なりの答えをいったん出すことができた。これは自分が調査団に参加できたからこそ得られた成果だ。得られた学びを活かし、「災害時に自分の命は自分で守れる」と自信をもって言えるような生徒を育てられるような防災教育を提供できる教員になるためにもっと様々な機会を通し、学びを深めていきたいと思う。



図1 震災遺構「陸前高田ユースホテル」



図2 防潮堤

# 陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (10)

## — 中学校における自分事化できる防災・減災教育の方向性 —

井阪愛子  
(奈良教育大学 専門職学位課程 (教職大学院))  
川田大登  
(奈良教育大学 国語教育専修)  
木幡美幸  
(奈良教育大学 社会科教育専修)  
大西浩明  
(奈良教育大学 ESD・SDGs センター)

The Tenth Teaching Material Creation for Education for Sustainable Development at Researching Cultural Heritage in Rikuzentakata City

## — Direction of Disaster Prevention and Mitigation Education in Junior High Schools —

Aiko ISAKA  
(Professional Degree Program (in Education), Nara University of Education)  
Hiroto KAWADA  
(Department of Japanese, Nara University of Education)  
Miyuki KOHATA  
(Department of Social Studies, Nara University of Education)  
Hiroaki ONISHI  
(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)

**要旨：**コロナ禍によって2年間中断した陸前高田市文化遺産調査が再開された。ESD 防災班は、見学や聞き取り調査などを経て、何度も津波災害を経験している陸前高田の人でさえ、いざというときに正しい行動がとれないということを知り、防災・減災についてより自分事として捉え、命を守る行動がとれる人になることの重要性を改めて認識した。本稿では、奈良県内の中学校2年生を対象に、年間を通じて様々な教科と連携した総合的な学習の時間に、防災・減災教育を位置付け、より自分事化でき、さらには中学生自身が積極的に地域と協働できることを目指した「防災教育プロジェクト」を提案する。

**キーワード：**ESD (持続可能な開発のための教育) Education for Sustainable Development  
防災・減災教育 Disaster Prevention and Mitigation Education  
自分事化 Own affairs

### 1. はじめに

奈良教育大学では、2012年度より毎年陸前高田市文化遺産調査団を結成し、岩手県陸前高田市周辺の文化遺産調査などに取り組んできた。コロナ禍により、2020年度、2021年度は中止を余儀なくされたが、今年度は本学教員3名、学部生3名、大学院生2名、教職大学院生1名からなる調査チームで、9月7日～10日にかけて、文化遺産調査班とESD防災班の2班に分かれて活動を行った。主な日程は表1の通りである。本稿は、ESD防災班として参加した4名による研究報告である。

ESD防災班の学生(川田、木幡)はいずれも中学校教員を目指しており、教職大学院生(井阪)は現職の中学校教

員であることから、現在の中学校における防災・減災教育の在り方を批判的に見つめ、真に自分事となり得る防災・減災教育はどうあるべきか、どのような資質・能力を生徒の身につけておかなければならないのか、また、そのためにはどのようなカリキュラムが考えられるかなどを、震災時または震災後の被災地の取組に学び、奈良の地から提案しようとするものである。

### 2. 調査から見てきたこと

今回の調査を経て、明らかになったことが二つある。一つは、人は頭で理解してもいざそのときになったら正しい行動をとることは難しいものだということ。もう一つは、万が一のときにその正しい行動をとるためには、単発的な

表1 4日間の主な日程

	文化遺産班	ESD 防災班
7日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多賀城跡、多賀城碑見学</li> <li>・多賀城廃寺跡見学</li> <li>・普門寺打合せ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東日本大震災津波伝承館見学</li> <li>・一本松、気仙中学校跡等周辺の震災遺構見学</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・陸前高田市教育委員会表敬訪問</li> </ul>	
8日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普門寺調査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市立博物館副主幹（前市民協働部長） 佐藤由也氏より講話「陸前高田市の復興状況と地域コミュニティづくりについて」</li> <li>・市立図書館長（元小学校長） 菅野義則氏より講話「防災教育と復興教育について」</li> </ul>
9日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普門寺調査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮設博物館の見学・講話「被災資料の復元状況などについて」市立博物館長 松坂泰盛氏</li> <li>・旧吉田家住宅主屋復旧状況見学 教育委員会副主幹 佐々木敦美氏 文化財係学芸員 曳地隆元氏</li> <li>・市内震災遺構（津波石碑）見学等</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東日本大震災津波伝承館見学</li> <li>・その他、周辺の震災遺構見学</li> <li>・常膳寺見学</li> </ul>	
10日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・藤里毘沙門堂見学</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊田館跡想定地見学</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岩手県立平泉世界遺産ガイドセンター見学</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中尊寺見学</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毛越寺見学</li> </ul>	

訓練や学習では身につかないものであるということである。

## 2. 1 頭では分かっている

市立図書館長の菅野義則氏の講話において、地震発生時の同氏の動きを語られた部分があった。要約すると次の通りである。

当時、教育委員会に籍を置かれていて、地震の日は出張で内陸の方に行っておられた。大きな揺れを感じ、「対応のため戻らなければならない。」と考え、市役所に戻ろうとされた。市役所は沿岸部にあり、津波が最上階まで到達するほどの低い場所にあった。しかし、津波が来るからその場にしようとは、そのときは考えられなかったようだ。市役所に向かっていったとき、下から走って上がってくる小学生たちとすれ違ったが、それでもさらに下に行ってしまった。そうすると、目前に津波が来ていることがわかった。その瞬間、慌てて引き返すことにし、ようやく高いところに向かって逃げるといふ行動になったそうである。

教員であり、まして指導的な立場にあり、これまで地震と津波の関係については痛いほど知っていたにも関わらず、「人間というのは、分かっているにもかかわらず正しい行動がとれない。」と、自責の念とともに話された。

## 2. 2 自分事化できていない防災・減災教育

東北の教員でもこうなるのである。奈良ではどうだろうか。毎年1回ある地震想定避難訓練も、どこまで真剣に

やれているだろうか。他地域に比べて災害そのものが少なく、内陸部にあり津波には縁遠い奈良の子どもたちが、いざというときにどこまで正しい行動がとれるのかは甚だ疑問である。

おそらくどの学校においても、学校安全計画やそれに基づいた避難マニュアル、学習計画などは作成しているのだろうが、避難訓練が学校行事化するなど、それらが機能しているとは思えず、自分事化されていない防災・減災教育に陥ってしまっていると感じる。学習においても、国語科は国語科で、社会科は社会科で、理科は理科のように、防災・減災に関わるものがバラバラに行われ、それぞれが単発的なものに終始していることが多いように思われる。

近い将来、南海トラフ地震が起きると言われており、奈良県内においても相当な被害が出るのが予想されている。その中で、正しい行動がとれるかどうかは、命を守れるかどうかの分岐点であり、中学生にとっては非常に大切な学びのはずである。

## 3. 防災教育プロジェクト

そこで、私たちは中学生を対象とした「防災教育プロジェクト」と題して、カリキュラム開発を試みた。

プロジェクトの課題設定を「震災時に命を守る行動ができる人になるために必要なこととは？」とした。生徒それぞれが自律システムやメタ認知システムを働かせて地域が持つ課題を自分事と捉えた上で、課題解決のために地域

の自然環境や防災についての知識や理解を深め、自らの安全を確保するための行動や、地域の安全に役立つ行動ができるようになることを目指した。そのための方略として、奈良県内中学2年生における、各教科と総合的な学習の時間の往還による防災教育プロジェクトの年間を通したカリキュラム・マネジメントの開発を行うものである。

まず、プロジェクトを「課題設定」「ステージ1～3」と分け、認知システムのレベル（取り出し、理解、分析、知識の活用）を意識したストーリーマップ（表2）を作成した。「ステージ1～3」をスパイラルに配置することで、履修主義へ偏ることを防ぎ、生徒自らが多面的・多角的に探究的な学習を繰り返すことで、「自身の命を守る行動ができる人から地域の人々の命を守る行動ができる人になりたい、地域の安全に役立つ行動ができるようになりたい。」と価値観の変容を促し、生徒同士や地域の人々との協働的な学習を通して深い学びへつながればと考えた。

具体的には、「課題設定」時から本質的な問いである「震災時に命を守る行動ができる人になるために必要なこと

とは？」を生徒達に投げかけ、「かけがえのない命」を守るためにそれぞれ生徒自身が、今何ができるのか、震災時には何ができるのか、何をしなければならないかを考えさせたい。そのために、東日本大震災時の陸前高田の被害や、昔から陸前高田に伝わる「教訓」を知ることから、私たちの住んでいる奈良県に意識を向けさせたい。奈良県も昔から震災に度々見舞われおり、今に残る教訓が「語り」や「掲示」として伝わっている。地域の先人たちが残した教訓から私たちへの思いを知ること、生徒達も次の世代や地域に自身の学びを伝えたいという意識の醸成につなげたい。

これらの学習は、総合的な学習の時間だけではなく、各教科において連携した取組として進めるため、カリキュラム・マネジメントを行った。例えば、「課題設定」時には、道徳「つながる命」を学習したうえで、「災害時、命を守るために必要なことは何だろうか？」という問いを持たせたい。また、「ステージ1～3」においても、国語科、社会科、家庭科、理科、保健体育科などの学習において、本プロジェクトに関連する学習と連携させ、生徒の学びが連続するよ

表2 防災教育プロジェクト ストーリーマップ

奈良県中学校2年 防災教育プロジェクト ストーリーマップ				
学習目標： ①過去の震災や今残る教訓の振り返りを通して、自らの安全を確保するための行動ができるようになる。 ②地域が持つ課題に取り組むことを通して、地域の安全に役に立つ行動ができるようになる。 ③自然現象である自然災害の発生メカニズムなど学ぶことを通して、地域の自然環境や災害や防災について知識や理解を深める。				
	課題設定	ステージ1	ステージ2	ステージ3
総合的な学習の時間	<b>【課題設定】</b> <b>「震災時に命を守る行動ができる人になるために必要なことは？」</b> ○災害時、命を守るために必要なことは何だろうか？	<b>過去の震災時に人々はどのように震災に向き合ったか、今に残る教訓を調べてみよう</b> ○東日本大震災、特に陸前高田市の被害について知り、被害に遭った先人の工夫や想いを知ろう	<b>守られる側から守り行動できる側になる！ 私たちにできることを考えよう</b> ○奈良県の災害を調べて、自分たちで教訓をつくろう ○私たちが必要と考える避難訓練を計画してみよう	<b>自分だけで終わらせない！ 地域に貢献できる発信をしよう</b> ○他学年と地域の人にこの1年の学びを伝えよう ○地域の人たちと避難訓練を成功させよう
教科との連携	○〈道徳〉 つながる命	○〈社会〉 東北地方について知ろう ○〈家庭〉 ビニール袋で米を炊いてみよう ○〈国語〉 聞き上手になろう ー当時の状況や思いを聞き出すインタビューー <国語> メディアの特徴を生かして情報を集めよう	○〈保健体育〉 応急手当、心肺蘇生ができる人になろう ○〈家庭〉 家族の住まいを安全・安心に ○〈理科〉 気象現象がもたらすめぐみと災害	○〈国語〉 1年間の「命を守る」教育を通して学んだことを話し合い、壁新聞にまとめよう



うにした。

#### 4. 本プロジェクトで期待すること

「ステージ3」にあるように、現状行われている避難訓練を批判的に捉え、義務であり強制される学校避難訓練から、地域が必要とする避難訓練を生徒自らが計画したい、実施したいと意識が高まることを期待する。生徒主体で教員や地域の方々と協働して避難訓練を計画・実施することを通して、地域の一員としての自覚が芽生え、つながりを尊重する態度や他者と協力する態度が育成されることを期待したい。

大きな災害が起こったとき、中学生に課せられる役割が非常に大きいことは、これまでの例からも明らかである。各地において、自主防災組織がつくられ、地域全体での防災訓練などが盛んに行われているが、避難所運営をはじめ、その主役は中学生であることが多い。「ステージ2」に「守られる側から守り行動できる側になる」とあるように、生徒一人一人が防災・減災について自分事として捉え、地域社会に積極的に関わっていこうとすることは、多大な社会参画であると同時に、地域社会にとっても大きな力となるものである。まさに、学習指導要領で謳う「社会に開かれた教育課程」を具現化したものになると期待する。

#### 5. おわりに

今回の陸前高田市訪問中、陸前高田市教育委員会より、防災教育副読本「明日のために」を提供いただいた。震災から2年後に発行され、市内の小中学生に配布されているという。山田市雄教育長が書かれた「はじめに」に次のような一文がある。



写真1 陸前高田市防災副読本  
「明日のために」

この防災副読本は、「知る」「考える」「助け合う」「未来へ」の4つのまとまりからなり、陸前高田市で起こりうる様々な自然災害、災害時の対応や事前の備え、東日本大震災のときに実際にあった支援・協力、産業や伝統文化、そして新たなまちづくりへの願い等、わたしたちが受け継ぎ語り継いでいくべきことについて、文や写真、図表、イラスト等をふんだんに用いてまとめています。

近年、災害が頻発化、甚大化する中で、どの自治体においても同様のテキストなどが作成されることが望まれるが、まずは学校教育の中で地域に応じた、且つ自分事と捉えられる防災・減災教育を推進することが求められる。

今回提案した「防災教育プロジェクト」については、今後連携する教科の具体的な学習計画も作成、実践し、その検証を図っていきたい。

#### 参考文献

- 坂本和音・加藤真由・北村恭康(2020)「陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(9) —ハザードマップの情報から防災を考える—」 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要第6号 p.165-171
- 矢ヶ崎典隆ほか編(2021)「新しい社会 地理」 東京書籍 p.252-253
- 陸前高田市教育委員会(2013)「陸前高田市防災教育副読本：明日のために」 p.1.

みつめる

石碑には何て書いてある？ また、どこの石碑だろう？

津波

欲捨てて？

海があるところかな？

岩手県陸前高田市広田町の津波に関する石碑。  
東日本大震災では、石碑のおかげで助かった人もいた。

でも、奈良県って海がないし  
津波来ないから関係ないんじゃない？

陸前高田市は岩手県の中で一番死者数が多かった。震災時、学校にいなかった  
小中学生の中には犠牲になった子もいた。

調べる

あなた達は、学校にいない時自分の命を守れるの？

守れないかも、どうしたら守れるかな？

奈良県は昔から土砂災害が多い。  
2011年 紀伊半島大水害で被災した  
十津川村の人にインタビューする。

防災士の人から命を守るための  
備えを覚えてもらう。

知識も身についたし、自分と家族の命は守れるかも

深める

自分や家族の命だけ守るのでいいのかな？  
地域の人たちの命も守るには何ができる？

学んだことを伝える

災害時に協力できるように近所づきあいする

伝え方の例

- ・津波てんでんこ
- ・広田町の石碑
- ・奈良県南部の石碑

石碑の背景にある人々の思い

津波てんでんこのような標語を作るのは  
どうかな？

広める

津波は来ないと、避難せずに亡くなった人もいる  
口伝や石碑には限界がある

地域の人を守るにはどうしたらいいだろう？ もう一度考えよう

避難訓練しよう

パンフレットを作ろう

## 単元目標

- 自分と地域の人々の身を守る防災学習の在り方を探究する過程において、身を守るために必要な知識・技能を身に付けることができる。 (知識及び技能)
- 災害から、自分と地域の人々の命を守るためにはどのような課題があるのか気づき、奈良県の災害やそれに対する対策を調べ、どのように向き合えばいいか整理して、地域に広める方法について考えることができる。 (思考力・判断力・表現力等)
- 防災の学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いの良さを生かしながら、地域の人達の命を守ろうと積極的に地域社会に参画しようとする態度を養う。 (学びに向かう力・人間性等)

## 本学習で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

- 多様性：岩手県と奈良県では起きるかもしれない災害に違いが見られること。地域によって起切られるかもしれない災害に違いがみられるということ。
- 相互性：広田町や奈良県南部に残る石碑の背景にある先人の想いは世代を超えて現代の私達でも共感できるということ。
- 有限性：先人がどんなに願っても忘れられてしまうため石碑等には限界があるということ。
- 連携性：学びを基に自分達の地域の人と、災害時に協力できるように連携する練習となるということ

## 本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- システムズ・シンキング：東日本大震災を単なる過去の災害と捉えずに、そこから得られる教訓などをもとに捉え直す。
- 長期的思考力：奈良県の過去の災害を調べ、未来に起きるかもしれない奈良県の災害を予測し、対策のための行動を取る。
- コミュニケーション力：クラスメイトと「広める」活動で何ができるか意見交流しながら考える。

## 本学習で変容を促す ESD の価値観

- 自然環境・生態系の保全を重視する：土砂災害を引き起こす原因として、人間活動による影響が高いとされる異常気象による集中豪雨等が挙げられる。これらを根本から防ぐためには、自然環境・生態系の保全を意識した生活が必要である。

## 達成が期待される SDGs

- 10 人や国の不平等をなくそう
- 11 住み続けられるまちづくりを
- 13 気候変動に具体的な対策を

## 第2学年 国語科学習指導案

国語教育専修3回生 川田大登

### 1. 単元名：「話を引き出す質問をしよう」

### 2. 単元の目標

- ・言葉には、相手の行動を促す働きがあることに気づき、さらに話を引き出すために、どのような質問をすればよいのかを理解することができる。 [知識・技能(1)ア]
- ・話の要点や全体像を考えながら聞き、話を広げたり深めたりする質問をすることができる。 [思考力、判断力、(1)エ]
- ・進んで記録したり質問したりしながら、話の内容を捉え、今までの学習を生かして話を引き出そうとしている。 「学びに向かう力、人間性等」

### 3. ESD との関連 (総合的な学習の時間でのインタビューの内容を含む)

#### ・本学習で働かせる ESD の視点 (見方・考え方)

##### 相互性

災害は自分から遠いところだけで起こるものではなく、奈良県でも大きな災害が起こったことを知り、かつその災害を経験された方が語る教訓には東日本大震災のものと共通する点がある。

##### 責任性

災害から身を守るためには自分たち一人一人が備えなければならない。

#### ・本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

##### コミュニケーションを行う力

インタビューに協力してくださった方に対して、真剣に話をきいたり、効果的な質問をしたりして、コミュニケーションを取り、話を引き出すことができる。

##### 進んで参加する態度

ただ受け身で話をきくだけでなく、疑問に思ったことや話を受けて考えたことを積極的に発言し、インタビューに協力してくださった方と対話することができる。

#### ・本学習で変容を促す ESD の価値観

##### 自然環境・生態系保全の尊重

災害の学習を通して、自然の力の大きさを知るとともにそれと共に生きていくために必要なことを考えようとする。

### 4. 評価規準

知識・技能	思考力、判断力、表現力等	主体的に学習に取り組む態度
・言葉には、相手の行動を促す働きがあることに気づき、さらに話を引き出すために、どのような質問をすればよいのかを理解している。	①話の要点や全体像を考えながら聞いている。 ②話を広げたり深めたりする質問をしている。	・進んで記録したり質問したりしながら、話の内容を捉え、今までの学習を生かして話を引き出そうとしている。

5. 単元計画（国語3時間、第1時と3時の間に「総合的な学習の時間」を入れる。）

	学習内容	指導上の留意点	評価
第一時	<p>1. 「質問をできるようにしよう」という目標を知る。</p> <p>2. 質問をするときのポイントを学ぶ。</p> <p>(1) 質問をする意味を考える。</p> <p>(2) 動画教材をみて、どんな質問ができるかを考える。(個人)</p> <p>(2) 考えた質問を一つ、ジャムボードに書き込む。</p> <p>(3) 質問を考えるときに有効な視点を学ぶ。(全体)</p> <p>(4) 話を引き出すための質問の仕方を理解する。(全体)</p> <p>3. ふりかえりをし、次時への見直しを持つ。</p>	<p>・総合的な学習の時間で予定しているインタビューを踏まえていることを伝える。</p> <p>・相手の話を広げたり、深めたりでき、より多くの情報を聞き出すことができるということである。</p> <p>・話の要点や全体像を捉えるための方法をふりかえり、ノートにメモを取りながら聞くように指示をする。</p> <p>・全員の質問を「5W1H」、理由や原因、事実確認等の観点に分けることで、視点を明示する。もし、それらの観点を示す質問が出ない場合は教師が提示する。質問の種類も扱う。</p> <p>・(3) で出た視点ごとにどのようなセルフで聴くことができるかを話し合いながら整理する。</p> <p>・次時は総合的な学習の時間でのインタビューに向けて準備をすることを伝える。</p>	<p>ノート(思・判・表①)</p> <p>ノート(思・判・表②)</p>
第二時	<p>1. 前時に学習した質問のポイントをふりかえる。</p> <p>2. 自分が訊きたい質問を考え、練習をする。</p> <p>(1) 総合的な学習の時間での学習を踏まえて、ききたいことを改めて整理する。(班)</p> <p>(2) 実際の質問のセリフを考えて、班で役割に分かれ、練習をする。(班)</p> <p>3. 授業をふりかえる。</p>	<p>・前時のノートの見直しをさせる。</p> <p>・事前に知りたい内容を先方に送り、また、内容の大体が懸かれたレジュメを頂いている。その内容をもとにさらに話す。</p>	

	(1)総合的な学習の時間で、話を聞き出すためにどんなことを意識したいかをノートに書く。(個人)		<u>ノート（主体的に学びに向かう力・人間性等）</u>
総合	十津川村の水害を体験された方のインタビューを行う。	・ノートにメモをさせる。また、してみたい質問を書く欄を設ける。	
第三時	<p>1・総合的な学習の時間でのインタビューをふりかえる。(全体)</p> <p>2. 国語科の学習を踏まえて、良かった点と改善できる点を洗い出す。</p> <p>(1)実際にされた質問と回答をみる。(全体)</p> <p>(2)良かったところや改善点を話し合い、班で改善した質問を根拠を持って考える。(班)</p> <p>(3)全体で共有し、ポイントを理解する。</p> <p>3. 単元をふりかえる。</p> <p>(1)総合的な学習の時間で話を聞いたときの自己評価を行う。</p> <p>(2)質問をするための大切なポイントだと考える点をノートに書く。</p>	<p>・質問をした生徒を褒める。</p> <p>・質問をした生徒のことを配慮して、前向きで肯定的な話し方で授業を進める。</p>	<p><u>観察・ノート（知識・技能、思判表②）</u></p> <p><u>ノート（知識・技能）</u></p> <p><u>ノート（主体的に学習に取り組む態度）</u></p>

# 「総合的な学習の時間」単元構想案

奈良教育大学専門職学位課程

平群町立平群中学校

教諭 井阪 愛子

## 1 単元名 「地域の人たちと避難訓練をしよう」

### 2 単元の目標

○地域の人たちと協働的に中学校区で避難訓練を行うための知識や技能を身に付けようとする  
ことができる。 (知識及び技能)

○避難訓練を通して災害時にどのようなことを考えて行動すればよいか、個人やグループで課題  
を立てることができ、そのための情報を集めて整理・分析して課題解決に向けて考えることが  
できる。 (思考力・判断力・表現力等)

○避難訓練を自分の事として捉え、避難訓練を通して地域をよりよくしていく主体者として社会に  
参画しようとする態度を身に付けることができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

### 3 ESD との関連

#### ・本学習で働かせる ESD の視点 (見方・考え方)

相互性…地域住民同士のつながりが地域には必要であり孤立してはならない。

連携性…地域住民で協働的に問題解決に取り組むことが大切である。

責任性…誰かに任せることだけでは、世界はよりよくなるらない。

一人一人が社会に参画する気概を持つ。

#### ・本学習で育てたい ESD の資質・能力

##### クリティカルシンキング

地域住民が主体的に参加できるような、新たな避難訓練の方法を見いだす。

##### コミュニケーション力

消防士の方々や地域住民の考えや意見を聞き、よりよい避難訓練を計画する。

また、社会全体で取り組んでいこうと周りの大人や子供たちにも考えを発信する。

##### 協働的問題解決力

地域住民と協働して、防災意識の高まりから問題解決にあたり避難訓練を計画する。

#### ・本学習で変容を促す ESD の価値観

○世代間・世代内の公正を意識すること

自分さえ避難できればそれでよいという考えは自分を大切にできていない。

○人権・文化を尊重すること

○世代間の公正を意識すること

避難時には誰一人取り残さずに避難できる。

#### ・達成が期待される SDGs

3 すべての人に健康と福祉を 11 住み続けられるまちづくり

**みつめる**

「今のままの避難訓練でいいの?」

やらされているだけ

危機感なんて持てないよ

避難訓練って本当は大事だよ

私たちが私たちのための避難訓練を計画してみよう!

**調べる**

地域の消防士の方に来ていただいて、避難訓練で大切なことを伺ってみよう

「命を守る行動」が大切なんだね

高齢者や子供は一人で「命を守る行動」ができない

日頃の「予防」が大事だね

自分達だけがよければいいのかな?

私たちにできることってなんだろう

避難訓練を地域の人と一緒にできたらいいな

地域の避難訓練を中学校として主催してみたい

私たちがだけでなく地域の人と協力して避難訓練を行おう!

**深める**

「中心発問」:〇〇中学校区の避難訓練を計画するのに必要な要素は?

案内班  
避難訓練のポスターが必要だね

ボランティア班  
避難時、地域の人に声をかけるよ

施設班  
町内の避難場所マップを作ろう

打ち合わせ班  
PTAや地域の方と打ち合わせが必要だね

教訓と訓練が大切だね

高齢者や赤ちゃんを守るよ

避難ルートを考えよう

協働することが大切だね

小さい時から町の人にお世話になってるよ

守られる人から守る人になりたい

この町が大好き  
大切にしたい場所

地域を守るのは私たち自身なんだ

**広げる**

〇〇中学校主催の避難訓練を行おう

訓練は本当に大事なんだ

近所の人にも参加の呼びかけをしよう

家族でも色々話し合ってみよう

地域の活動に参加しよう  
地域の人々のつながりが大切だね

教訓と訓練が大切だね

一人でも多くの人と避難訓練がしたいな

私たちは地域の一員なんだ



田中氏は上記論文で、本像のほか九戸村長興寺の伝聖観音菩薩坐像、平泉町毛越寺寿徳院の菩薩形坐像の三例を岩手県下における十四世紀禅宗の仏像彫刻として紹介しているが、これらはいずれも院吉・院広の作風を踏襲しており、かつ天冠台の制や下衣のあしらいが本像と同趣である。とはいえ細部には相違もみられ同一仏師や同一工房作とみなせる類似ではないが、共通の規範となる作例が存した可能性も考慮すべきであろう。本像の柔和な相好や流動感ある衣文はこれらの中でも抜きんでており、陸前高田市域のみに留まらず、岩手県全域の南北朝時代彫刻を代表する作例と評して過言でない。

両脚部内面の墨書再興銘「永祿二年（一五五九）」について、三行目第十四字については「當」と読まれることが多いが、草書体の「書」にも見え、かつ「中務」の唐名が「中書」であることを今回の判読の根拠としている。また五行目第八字は従来「受」と読まれ、仏師受清と、同年六月に江刺市光明寺地藏菩薩坐像を再興した仏師寿清とを同一人物とみなす説が遠藤氏らによって示されているが、この字は「覚」の草書体とも近似し、かつ天文十七年〜二十一年（一五四八〜一五五二）頃に京都・妙顕寺一塔両尊像を造った四条東洞院大仏師覚清の存在が知られていることから、今後詳細な検討を要すると考え、読みを確定しなかった。

本年度調査に際しても、普門寺御住職熊谷光洋師、陸前高田市立博物館長松坂泰盛氏をはじめとする、陸前高田市の方々に数々のご高配を賜った。関係各位に対して深甚の謝意を表したい。

#### 参考文献（抄。本文中に記した文献は省略）

- ・『江刺市文化財調査報告書 江刺の仏像』（昭和六十年三月、江刺市教育委員会）
- ・清水真澄「仏師院吉・院広の事蹟とその作例」（同氏著『中世彫刻史の研究』所収。昭和六十三年三月、有隣堂）
- ・横浜市歴史博物館編『中世の世界に誘う 仏像 院派仏師の系譜と造像』展図録（平成七年十一月、横浜市歴史博物館）
- ・海岸山普門寺監修『海岸山普門寺物語』（平成十七年十月、光陽美術）
- ・山本勉『日本の美術四九三 南北朝時代の彫刻 唐様の仏像と伝統の残照』（平成二十九年六月、至文堂）
- ・根立研介『日本の美術四九四 室町時代の彫刻 中世彫刻から近世彫刻へ』（平成二十九年七月、至文堂）

## 陸前高田市普門寺の伝聖観音菩薩坐像

奈良教育大学教授 山岸公基

地元の方々のご協力により平成二十四年度から令和元年度まで毎年継続実施してきた奈良教育大学陸前高田市文化遺産調査団であったが、令和二年度・同三年度はコロナウイルス感染症に起因する行動制限により中止のやむなしに至った。令和四年度は三年ぶりに調査が実現し、所蔵者ならびに関係各位のご尽力により、伝聖観音菩薩坐像をはじめとする普門寺（陸前高田市米崎町地竹沢一八一）の仏像調査を実施することができた。本稿では、観音堂本尊伝聖観音菩薩坐像について報告することとする。

普門寺伝聖観音菩薩坐像は昭和四十九年に岩手県の文化財に指定された。つとに田中恵「岩手県十四世紀禅宗の仏像彫刻について―三例の紹介を兼ねて―」（『岩手大学教育学部研究年報』第五〇巻第二号所収。平成三年二月）、遠藤廣昭「岩手県・普門寺伝聖観音菩薩像について」（『横浜市歴史博物館紀要』第六号所収。平成十四年三月）といった専論があり、陸前高田市域の仏像としてもっとも著名な作例の一つである。ブロックを積み重ねたような身体構成を示し、屈曲する衣文・衣縁で像表面をにぎやかに飾る造形や、像心束と、腰の高さで像内に左右一対彫り出され、中に雇柄を納めて緊結するための仕口である前後束を有する本像が、南北朝時代十四世紀前半〜中葉に足利尊氏に重用され等持院・天龍寺といった京都所在の禅宗（臨済宗）五山・十刹寺院の本尊を造立し、また守護をはじめとする地方有力者が檀越となった諸山寺院本尊の多くも手がけた著名仏師院吉「活躍期徳治三年（一二三〇）〜貞治五年（一二三六）以前」やその子院広の作風と近いことは、遠藤氏らによって指摘される通りである。本稿では田中氏・遠藤氏の大枠での見通しを、いくつかの観点から精緻化することに努めたい。

基本帯の概形が正面で波形を呈し、紐一条・無文帯・紐一条で構成される天冠台の制は、観応三年（一二三二）院吉・院広・院遵（院遵は院広の弟もしくは院吉の高弟）作の静岡・方広寺（諸山寺院である茨城・清音寺伝来）宝冠釈迦如来坐像（髻を結び、定印を結び、全跏趺坐する像容が本像と同じ）、文和二年（一二三三）頃、院広・院遵作の諸山寺院山梨・栖雲寺宝冠釈迦如来坐像と共通している。とりわけ栖雲寺像と本像とは、小異を除けば基本的に一致している。ただし本像の場合、下衣上端が水平となり、左膝前で裙のさらに下層のもう一重の衣縁が表されないなど、栖雲寺像に比べ造形が全体に要約化していることは否めず、造立年代はやや降るとみるのが自然であろう。

### 保存状態

白毫、亡失。左上瞼の一部、欠失。両手先については後補説があるが、当初か。

### 銘記

両脚部内面墨書（黒漆塗りを削り落として記される）

再興檀那中務大輔宗綱為親父一鏡老母

貞春 又大和田安藝守老母空室十一年

又金丹波守為老母中山□同中書之上祐□

同對屋

住持充察代 佛師□清

于時永祿二年（己未）秋冬

### 伝来

普門寺観音堂本尊として伝来。普門寺蔵の『海岸山普門寺住山記（由来記）』に、普門寺開山記外和尚が元太宗より賜ったとされる「今之本尊観自在尊像」、仙台藩の地誌である『封内風土記』〔明和八年（一七七二）成稿〕普門寺の項所載の「本尊唐佛観音」に当たる可能性がある。

### 備考

一、実査 令和四年九月八日（山岸公基・笠置千尋・辰上亜弥子・広野祥子）

白毫をあらわす。鼻孔を穿つ。

耳垂環状貫通。

三道相をあらわす。

下衣、裙、大衣（袈裟）をつける。

下衣は腹前にあらわされ、上端が水平となる。上縁が紐・無文帯・紐状となる。この下衣は裙の上端である可能性が留保される。裙は両膝を覆う。右膝の内側より裳先に至る下層の衣縁は、全跣趺坐する右足によって引き上げられた裙の下縁と理解される。

大衣（袈裟）は、胸元を寛げる通肩と考えられる。左肩を覆う大衣一重目は、正面での下端が左袖から左膝後ろにかけて露出する（なお左袖口は袋状を呈するか）。左肩にかかる大衣一重目の上端は左腹前で大衣二重目の上端の下層よりあらわれるが、この部位はやはり袋状と理解される。左肩にかかる大衣一重目は像背面の大半を覆う衣へと連続するとみられるが、背面側では襟際の袋状部を含め上端が大きく折り返されており、結果として左肩後ろ下がりから右腰に至る衣縁があらわされる。この衣縁は右腿下より再びあらわれ（よって像の右肩最上層を覆う衣は大衣上端の折返しとなる）、像前面襟際の袋状部の下層を通って左肩を覆う大衣二重目の、左腋にあらわれる上端折返しの縁へと連続すると理解される（よって左肩最上層を覆う衣は大衣二重目の上端折返し部となる）。そして右腕を覆う大衣の下端は右膝後ろからあらわれて右袖に至り（よって右袖口も袋状と理解される）、左袖で大衣一重目の下端の上層よりあらわれ、左腿に至る。両足先は共に大衣に覆われており、上に組む右足の前面には特徴的な衣文があらわされる。

両腕を屈臂し、腹前で右掌を上にして（左掌を下にして）両掌を仰ぎ重ね、両第一指頭を合わせる（定印）。右足を上にして全跣趺坐する。

### 品質構造

ヒノキと思われる針葉樹材を用い、頭体幹部を通して両耳後ろを通る線で前後二材矧ぎ（あるいは割矧か。材幅一四・七cm）とし、内割を施した後、割首とすると思われる。体幹部前面材には像心束（高三・八cm）を彫り残す。また体幹部材には前後矧ぎの矧面で接するよう両腰脇辺に、両体側部材にも及んで前後束を彫り残している。この頭体幹部材に、髻、両体側部、両脚部、両前膊半ば以下を覆う袖部、両手先（一材）、裳先を別材で造り、寄せる。内割面は黒漆塗りとし、体部内には矧目に沿って布貼りを施す。像表面は錆地漆箔とし、玉眼を嵌入、白毫（亡失）を別製嵌入とする。

伝聖観音菩薩坐像

岩手県陸前高田市米崎町地竹沢一八一 普門寺

木造 漆箔 玉眼 一軀 像高五五・五cm（一尺八寸三分）

法量（単位cm）

像高	五五・五（一尺八寸三分）	髮際高	四三・五（一尺四寸四分）
頂一顎	二三・六	面長	一二・〇
面幅	一〇・七	耳張	一二・八
面奥	一三・八	胸奥	一五・四
腹奥	一八・三	肘張	三四・五
膝奥	三〇・九	膝張	四一・三
膝高（右）	八・二	膝高（左）	八・五
裳先（像最大）奥	三八・一	像底（幅）	四〇・三
像底（奥）	三四・一		

形状

髪、束目入り毛筋彫り。髻を結う。元結は上端のみで紐二条。髻正面中央全面に元結飾り（素面）をあらわし、上端は元結の上に出て圭形を呈する。髪束は上端に一、以下左右に各三の環状部を垂らす。髻背面には傾斜面を作り、縦方向の毛筋を刻む。

地髪部、台上の毛筋は髻へと集中する。台下地髪部は正面中央で毛筋を左右で分け、額左右に二束の後れ毛をあらわし、その内側が天冠台を二度巻いた末に筆先状の末端を髮際に沿って垂下する。外側は天冠台の半裁花の花芯に下から挿入される。髻髪は一条耳をわたり、一条はその前で波打ちながら筆先状に垂れる。台下背面の毛筋も縦に結び上げつつ髪束を表現している。

天冠台、基本帯 紐一条・無文帯・紐一条。正面で概形が波形を呈する。両耳上に基本帯飾（半截花。花芯が下）を配する。



图 14 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：両脚部見込み

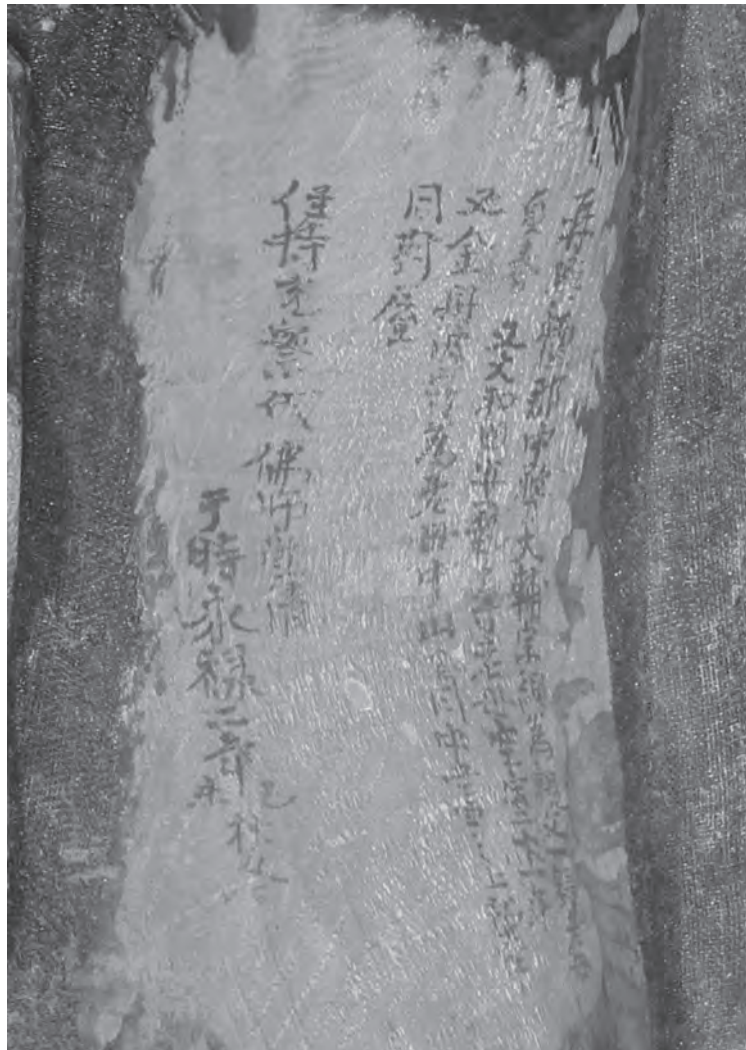


图 15 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：像底墨書銘

(6)



图 10 岩手・普門寺伝聖觀音菩薩坐像：頭部右斜側面



图 11 岩手・普門寺伝聖觀音菩薩坐像：頭部左斜側面



图 12 岩手・普門寺伝聖觀音菩薩坐像：頭部右側面



图 13 岩手・普門寺伝聖觀音菩薩坐像：頭部左側面



图9 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：頭部正面

(4)





图6 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：全身背面



图7 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：像底

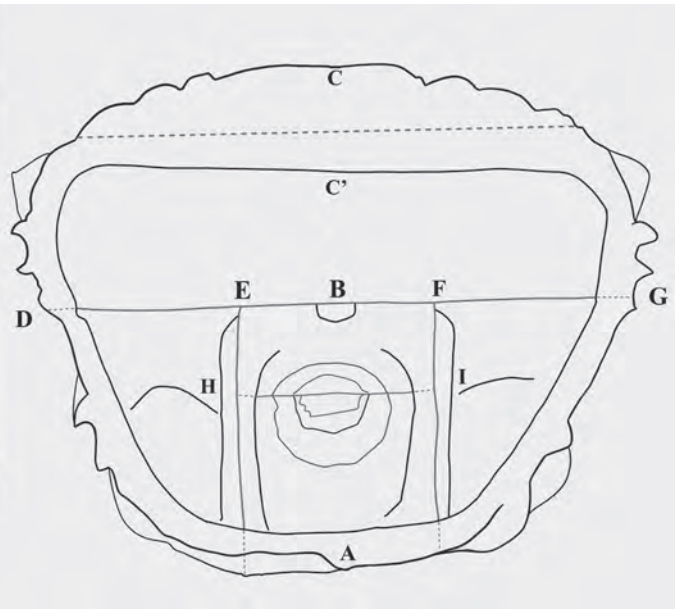


图8 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：像底図



图2 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：全身右斜側面



图3 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：全身左斜側面



图4 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：全身右側面



图5 岩手・普門寺伝聖観音菩薩坐像：全身左側面



图1 岩手・普門寺伝聖觀音菩薩坐像：全身正面



岩手県陸前高田市普門寺  
仏像調査報告書

2023年3月  
奈良教育大学

令和4年度 近畿ESDコンソーシアム  
奈良教育大学 陸前高田市文化遺産調査報告書

令和5年3月31日

国立大学法人奈良教育大学  
〒630-8528 奈良市高畑町  
ESD・SDGsセンター  
TEL 0742-27-9367・FAX 0742-27-9147（教育研究支援課）